

「農家民宿・民泊における地域食材を利用した朝食や体験について」
に関する研究

静岡大学 農学部 藤本ゼミ

指導教員：准教授 藤本穰彦

参加学生：杉村直柔、鈴木碧人、伊東さの子、鈴木悠真、高橋理緒、中川佳音、森真奈、山本愛華、湯浅亮太、井関早弥香、井上元、菊池敬太、杉野浩弥、鈴木然可、高草百嶺、中込光穂、堀純奈、牧野純也、若佐夏未、大東直香、沖野知夏、岸田周士、杉山喜紀、江里口侑真、加藤美紀、桐生適聞、清水聖樹、杉浦和希、杉浦颯希、鈴木勝也、谷口拓夢、田茂井理沙、寺島千尋、寺本真由子、遠山園華、中田明里、野村健太、樋口諒、宮崎良、山中大樹、石渡加純、江塚晃葉、岡本尚哉、島村七晴、吉村陸

1. 要約

川根本町の食の魅力を、地域住民が主体となって創出する。最も美しい村の「美食革命を担う地域主体の創生」を促すことが本研究の究極目的である。今年度は、フードマーケティングの手法を洗練させ、近年集中的に開業が続く川根本町の農家民宿・民泊について、食、景観、体験、観光まちづくりのテーマを統合させていった。同町の農家民宿・民泊をコーディネートするNPO法人かわね来風をゲストに、課題を共有し、学生たちの提案を集めた。企画・情報発信の面では、キー・パーソンとなる学生も生まれ、活動がより深化した一年であった。

2. 連携研究の目的

日本で最も美しい村連合の加盟村である川根本町では、住民主役の美食革命が期待されている。町の魅力アップのための地域食材磨きとその食べ方の交流を促す住民主体の形成を目的とする。参加学生は、地域内連携や美食の発掘、食べ物と食べ方の町内交流をコーディネートし、「美食革命を担う地域主体の創生」を促す。

3. 連携研究の内容

川根本町は日本で最も美しい村の加盟村である。世界基準の村づくりを宣言している同町における美食革命もまた世界基準が求められる。町内の食の地域資源を磨き上げていく。食は日常的なものであり、毎日数度の実践を伴う。食の持続的な担い手である住民個々の生活を見つめ、毎日の楽しみや豊かさを、食べ物と食べ方の交流のなかで増やしていく。今年度は、近年集中的なオープンが続く、農家民宿・民泊を取り上げ、食と体験の魅力づくりについてアイデアを出し合った。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

地域住民が、町内の食の地域資源に気付きなおし、美食革命を行なっていくための地域主体とネットワークが形成されれば、大きな財産となる。そこで、近年集中的なオープンが続く、農家民宿・農家民泊に注目し、それぞれに体験宿泊や体験調理の企画を実施するなどして連携活動を深めていった。NPO法人かわね来風がインキュベートしている農家民泊を拠点として、メニューを考え、食材を集め、調理し、食べる会を「集落間」のネットワーキングを意識しながら企画していく。並行して、役場内の連携促進、町内関連団体がサポーターとなれるような仕組みづくりを意識して活動し、町内全員参加の美食革命を目指した動きが立ち上がることを目指す。集落や家庭、UIターン者が経営する農家民泊、それぞれの食の個性と多様性を地域性のなかに実現するレシピが開発されれば、当初研究の目的に掲げた期待に応える成果となるだろう。

(2) 実際の内容とその理由：B（計画の内容を一部変更して実施した）

今年度は、ゼミ責任者の杉村が積極的なコーディネーションを展開した。2019年8月には、高校生アカデミックチャレンジと連動して、県内の農業高校生を招き、天空の宿で共同調理を行い、饗食のワークショップを行った。

2019年10月には、中村麻理先生（名古屋文理大学・フードマーケティング）を静岡大学農学部にお招きし、フードマーケティングの視点から、「食と旅の経験」を切り口に川根本町の農家民宿・民泊の課題と資源を共有した。2019年11月には、日本で最も美しい村連合の審査委員・依田真美氏に、ゆる宿Vokettoに体験宿泊をして頂き、学生・宿泊者等と共にワークショップを行った。2019年12月には、笹木一則氏（川根本町役場企画課）を静岡大学農学部にお招きし、最も美しい村運動としての川根本町の地域づくりについて講義をして頂いた。

以上の内容をふまえて学生たちは、川根本町の「農家民宿・民泊における地域食材を利用した朝食や体験について」、合計42件の魅力化の提案を行った。

(3) 実績・成果と課題

川根本町の「農家民宿・民泊における地域食材を利用した朝食や体験について」、マーケティングの手法を応用して食の魅力や体験、景観や観光まちづくりへのアプローチを展開した。

他方で、計画当初に掲げていた農家民宿・民泊を切り口にした「集落間」での食学習の深化や、地域内の連携促進、「美しく品格のある邑」や「日本で最も美しい村」とのトータルブランディングまで活動を展開することは出来なかった（2020年2月1日-2日に千年の学校とコラボレーションした学習会企画が町側から内発的に立ち上がってきたことは本連携研究の活動成果である）。「美食革命の地域主体」を、コミュニティ・集落をひとつの起点としながらも、町内全員参加で興していく仕掛けのデザインが今後とも継続して課題である。

(4) 今後の改善点や対策

食のまちづくりは、暮らしている地域住民の皆さんが、学生や観光客などとの出会いのなかで、楽しみ、豊かになることで促進される。毎日の暮らしのなかの喜びや発見を、つぶやき、共有する、あるいは共に見つけるコミュニティの力をいかにはぐくむことができるかが、中長期的な改善点であり、対策である。そのために、農家民宿・民泊はよい窓口となる可能性がある。地域コミュニティとの浸透もすすむ川根本町の農家民宿・民泊の今後の展開もフォローしていきながら、地域の食の魅力づくり、農の再生につながる活動を今後も継続していきたい。

5. 地域への提言

2017年度は、それぞれの学生グループの自由度を高め、川根本町を五月雨式に訪れることで、様々な「地域の食」を発見し、SNSツールを利用した社会実験的取り組みを数多くこなしてもらった。「地域の宝」を「発見する」として、それを様々なツールによって「磨く」ためにフィールドワークに通い、さまざまな交流を通して学生たちの素直な感想や魅力を発信するという「みつめるまなざし」を鍛え上げることができた。昨年度開発したハッシュタグ「#かわねのne」は、じわじわとゼミ等学生以外にも普及しはじめている。

2018年度は、学生と地域住民の出会いの関係性を軸に、どこで、誰と誰が反応を起こすか/起きるか、春先から久野脇、青部、地名、千頭等で小さなアクションを起こしながら観察していた。地域主体の形成を促進するのに火が起こったところにアクションを興そうと考えた。その結果、くのわき未来の会の皆さんと代表学生・杉村直柔くんの出会いがきっかけとなり、ひとつの活動デザインが出来ていった。

今年度は、十分に関係性を構築した杉村くんがコーディネーターとなって企画の全体をマネジメントし、後輩学生たちに紹介しながら、新たな提案を引き出していった。その結果、合計42件の農家民宿・民泊に対する魅力づくりの提案がなされた。

6. 地域からの評価

具体的な「食」がテーマになったことで、フードマーケティングや食品学、園芸学の専門家を交えたワークショップの開催が実現し、これからの地域づくりのための食の魅力が大きく発見され、磨かれた一年になった。本年も多くの学生が川根本町を訪れ、また川根本町住民が静岡大学を訪れて講義する機会が出来るなど、いろいろな人同士が直接交流し、つながりが生まれ、深まったことはたいへん財産になった。このような関係性は、3年度かけて構築されたものであり、かなりの人的資源・ネットワークが蓄積されたように思う。

ただし、当初計画されていたような近年増えている農家民泊のブランディング、「集落間」のつながりや旧町間（たとえば青部-徳山など）のつながりの場づくりまでは到達しなかった印象である。

川根本町として、昨年度に引き続きこれから長く深い付き合いになる足掛かり、きっかけとして大きな成果が蓄積されたことは間違いない。成果を単年度ではかるのではなく、中長期的な目線で、これからのことを考えていきたい。今後の継続的な取り組みが大いに期待される。

2020年度は、「最も美しい村」に加盟して5年目の再審査も予定されている。食の魅力づくりは、加盟審査時点で指摘されていた改善事項であり、次回審査までに大きく進歩したところをアピールしたい点である。地域の力を集めて、「食」を通じて、楽しみと豊かさを表現していきたい。それが「農（＝農業や農村、農村生活）」へもアプローチするきっかけになると思っている。